第４課　子羊にふさわしい方

【暗唱聖句】

「泣くな。見よ。ユダ族から出た獅子、ダビデのひこばえが勝利を得たので、七つの封印を開いて、その巻物を開くことができる」黙示録5：5

【日曜日・天の玉座の広間にて】

「その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声が言った。「ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう」黙示録4:1

　その後といって４章は始まります。もちろん、これは３章までの７つの教会に対する啓示があったその後ということですが、それがすぐのことなのか、あるいはいくらかでも時間がたっているのかわかりません。もし、三日でも一週間でも時間の経過があったとすれば、その時間の分だけ、託された教会のことを思い、一人悩み苦しんだかもしれません。ではその後ヨハネに何が起きたのか。するとこう続きます。「わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった」と。ヨハネの目の前になんと突如大きく開かれた門が現れたのです。つまり、その瞬間、孤独なパトモスという島は天とつながり、そこはまさに天国の入り口となったのでありました。そして、続いてラッパのように大きく響き渡るような声で、「ここへ上って来い」というのを聞きます。つまり、問題の解決は神の国の中にあるということです。キリストはその問題はそこに置いといて、お前は神の国に入れと言われたのです。問題から逃げるのではなく、また具体的に立ち向かうのでもなく、まず、天の門から神の国に入ってこいと。このことは、キリストの次の言葉と一致します。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」マタイ6:33

しかし、一刻を争うようなことかもしれないのに、なぜそんな悠長なことを言っていられるのでしょう。ここからが核心部分なんですが、キリストはヨハネにこう言われました。

「ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう」

すべてはもう決められているのです。すべては神のご計画の中にあるのです。必ず起こるというのですから、そうなるのです。ということは、今直面している問題も、神のご計画のなかにあって、それがたんたんと起こっているに過ぎないということです。私たちはこの先どうなるんだろうと慌ててしまうのですが、神の国からすべてを見渡したとき、おそらくすべては「なるほど、そういうことだったのかと」納得することでしょう。

「わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた」黙示録4：2～3

ヨハネが天において最初に目にしたもの、それは神の玉座でした。玉座には神が座っておられました。この玉座（御座）という言葉は黙示録の中で４０回以上も出てきます。玉座は神の絶対的主権、神の支配を象徴しています。多くの困難が押し寄せる中で、キリストはまずヨハネに全知全能なるお方がすべてを支配しておられることを思い出させるために、この玉座の前に導いたのです。「神とサタンとの大闘争における中心的問題は誰が支配権を持っているか」（ガイドＰ２６）という点にあります。この世においては確かに多くの困難があります。しかし、すべてを支配しておられるのは神様であることを、そして私たちはいま、その神様の愛の中で守られているのだということを忘れてはなりません。

「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです」黙示録4:11

「玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますように」黙示録5：13

天において神様がすべてを創造されたことに対し賛美が捧げられ、また御子が人類を贖ってくださったことがほめたたえられています。これが礼拝を捧げる理由なのです。

【月曜日・玉座の広間における天の会議】

「また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた」黙示録4:4

玉座の周りには24人の長老が座っています。彼らは誰なのでしょうか。義の象徴である白い衣を着て、救いの象徴である冠をかぶっていることから、栄化された聖なる者たちであることを示唆しています。「24」という数字は完全数の12＋12、旧約の12部族と新約の12使徒が合わさり全時代の聖なる民全体を象徴しています。また、地上の聖所において24組の祭司の長が交代で奉仕をしていたことをイメージさせます。

さらに、24人の長老が他の聖書箇所に一切出てこないことから、特別な存在である可能性もあります。ガイドの著者は一つの説として、イエス様が復活されたとき一緒に復活した者たちではないかと述べています。

「イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」マタイ27：51～53

「二十四人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出し」（4:10）ます。自分たちの冠を玉座の前に投げ出してとは、神様に対する完全降伏のしるしです。自分を放棄し、神様に明け渡すことです。そして、神様に賛美を捧げます。

また玉座の中央と周りに4つの生き物が登場します。

「玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。」黙示録4：6、7

いったいこの4つの生き物とは何のことでしょうか。「4」という数字は、東西南北全世界を網羅しているということの象徴です。

「この後、わたしは大地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、大地の四隅から吹く風をしっかり押さえて、大地にも海にも、どんな木にも吹きつけないようにしていた」黙示録7:1

ここにも4人の天使が登場しますが、彼らは大地の四隅に立ち、神の印が聖徒らに押されるまで、神様の裁きに伴う災いが来ないように押しとどめています。24が全時代を網羅するのに対し、4と言う数字は全世界、すべてを支配していることを現わしていると考えられます。またこの4つの生き物は旧約聖書に登場します。

「わたしが見ていると、北の方から激しい風が大いなる雲を巻き起こし、火を発し、周囲に光を放ちながら吹いてくるではないか…その中には、四つの生き物の姿があった。その有様はこうであった。彼らは人間のようなものであった」エゼキエル書1章5節

エゼキエル書にも4つの生き物が登場します。獅子や牛、鷲のような姿の特徴が同じであることから、黙示録とエゼキエルに登場する4つの生き物は同じと考えて良いでしょう。これらの特徴は黙示録ではイザヤ書に登場するセラフィム（イザヤ6：2，3）のように常に神様を賛美していること、そしてエゼキエル書では常に神様の御心にままに動いていることがわかります。4つの生き物は全世界を守っている特別な天使を現わしていると考えられます。

【火曜日・封印された巻物】

「またわたしは、玉座に座っておられる方の右の手に巻物があるのを見た。表にも裏にも字が書いてあり、七つの封印で封じられていた」黙示録5：1

巻物というのはギリシャ語で「ビブリオン」。パピルスという幅２０センチ、長さ２５センチの紙をいくつにもつなげ、それを巻いたものです。ちなみにこの黙示録は全巻で５，４メートルほどの巻物となるようです。特徴的なのは表にも裏にも字が書いてあり、七つの封印で封じられていたということです。これはローマ時代の遺言の形式です。当時遺言を作成するとき、７人の証人が呼ばれ一人一人が封印し、封印した箇所はろうで塗られ、証人はそこに署名しました。そして、遺言を残した人が亡くなったとき、この７人の証人が呼ばれ、その立会いのもとで遺言の封印が解かれ、中が開かれるのでした。

そのような巻物が神の右手の握られていたということは、神ご自身の地球に対する重要な最終的な意思が書かれてあると理解することができます。また４章１節の「これから必ず起こるべきこと示そう」とあるので、そのことがこの巻物の中に書かれてあり、黙示録はこれからいよいよここから本題に入っていくということになります。

一人の力強い天使が、「封印を解いて、この巻物を開くのにふさわしい者はだれか」（黙示録5：2）と大声で告げます。７人の証人の立会いももとでなければ遺言が開くことができなかったように、この特別な神のご意思が示されている巻物の封印を解いて、中を開くことのできる人は誰かと大声で告げられるのです。これは全宇宙への問いかけであります。ところが、天にも地にも地の下にも、この巻物を開くことのできる者、見ることのできる者は、だれもいなかったと続きます。どんな偉人も英雄も、天才も指導者も、み使いたちでさえ、それを解くことはできなかった。これはいつの時代にもある、いろいろな占いとか、口寄せとか、ああいったものがいかに欺瞞であるかを教えている。人間には決して未来を知ることはできないということです。誰にもわからないことが、こうして黙示録を学ぶ者には開かれ、明らかにされようとしていることに本当に厳粛な思いにさせられます。

神様の最終意思、最終的な人類救済のご計画が秘められたこの巻物を開くことのできるものがいないのです。それで、ヨハネは激しく泣きます。ヨハネが思わず泣き出してしまうほどの息のつまるような緊張感がそこにはあったのでしょう。天国において、神と聖霊とみ使いたちの前で、地上に生きるヨハネただ一人だけが泣いているのです。ヨハネの泣き声がだけが天に響き渡っているのです。なぜ、いったいなぜヨハネは泣いたのか。私はヨハネの涙は実は私たちの涙でもあると思うのです。動機なき殺人、いじめ、とじこもり、病気、死、こんな異常な世の中がいったいいつまで続くのかと、ヨハネは泣きながら叫んでいるのです。この封印された巻物が解かれなければ、罪の世に終止符が打たれないからです。世が終わるなどと言うと、怖いと感じる方もおられるかもしれません。しかし、このような世の中が続くほうがもっと恐ろしい。世の中はますます悪くなっていくでしょう。

では、いったい誰がこの巻物を解くことができるのしょうか。ヨハネが泣いていると長老の一人が「泣くな。見よ。ユダ族から出た獅子、ダビデのひこばえが勝利を得たので、七つの封印を開いて、その巻物を開くことができる」（黙示録5：5）と告げます。ここについにイエス・キリストが登場するのです。初めであり終わりであるイエス・キリストが、最後の時を導かれるのです。

【水曜日・子羊はふさわしい方】

巻物を解くことのできるお方はユダ族の獅子、ダビデのひこばえと言います。ひこばえとは樹木の切り株や根元から群がり生える若芽のことで、つまりダビデの家系から生まれたものということです。ところがヨハネが顔をあげて見てみると、そこにおられたのは獅子ではなく、なんと屠られた小羊、血を流し、傷ついた子羊だったのです。宇宙の中心におられ、すべてを支配しておられる方は傷ついた子羊だったのです。これが神の世界、力ではなく愛が支配する世界の光景なのです。

　ここで御座におられる父なる神、その前におられる７つの霊すなわち聖霊、そして御子なるキリストと三位一体の神さまが勢ぞろいします。そして、この地上のことはすべてキリストに委ねられているのですから、当然キリストが巻物を開くのです。巻物は父なる神のご意思です。聖霊はこのご意思が実現するために、圧倒的な力で我々に臨んできます。すべては、古き時代に代わり、新しい時代が始まるためです。そこにはもう罪は存在しません。ですから、死も悲しみも病も存在しないのです。24人の長老も4つの生き物も、子羊なるキリストをほめたたえ、天は賛美に包まれます。

【木曜日・五旬祭の重要性】

「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです」使徒言行録2：33

「イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである」ヨハネ7：39

ヨハネは屠られた子羊としてのイエス様が天におられるのを見ました。使徒言行録ではイエス様が昇天して神の右にあげられたと記されていますが、その天におられるイエス様を見たわけです。このことが真実であることは、五旬祭において、聖霊が降下したことから明らかとなりました。イエス様の天における働きの一つが、聖霊を世に送ることだったからです。

「ペンテコステの聖霊降下は、贖い主の就任式が完了したことを知らせる天からの通報であった。主は約束に従って、ご自分の祭司、また王として、天と地のすべての権威を引き継ぎ、神の民の上に立つ油注がれた者となられた印として、弟子たちに天から聖霊を送られたのである」（希望への光1370ページ）